

乳幼児愛護週間について

中央社會事業協會 高 島 巖

大正十五年十二月、財團法人中央社會事業協會は、東京に於て、第一回全國兒童保護事業會議を開催した。

この會議は、我國に於ける最初の兒童保護事業關係の會議で、各府縣は勿論、遠く朝鮮、臺灣より多數の兒童保護従事員及び該事業關係者が參集し、從來問題視されて居つた兒童に關する各種の問題について、熱心討議攻究せられたのであつた。その結果、貴重なる收穫を得て、我國兒童保護事業の發達上多大の貢獻をもたらしたことは、云ふ迄もないが、その席上、最も重要にして根本的なる問題として、出席者一同の論議の中心となつたのは、我國に於ける乳幼児死亡率の問題であつた。

*

我國は、之を諸外國に比較して、婦人が著しく家庭的であるといふ特徴を有してゐる。この特徴が、子供の養育上に及ぼされ、諸外國の母親たちが、多くその子女の養育を他人の手に委ねてゐるに反して、母親自らがその兒を養育するといふ良習慣が、古くより廣く行互つてゐるのである。斯くの如き實情を見て外國人は、

「日本は子供の樂園である」

とさへ賞讃してゐるのであるが、この樂園日本に於いて、矛盾を稱すべきか將又皮肉をいふべきか、我國に於ける乳幼児死亡率は、歐米各國のそれに比較して、はるかに高率を示して居るのである。

試みに、我國に於ける一ヶ年間の乳幼児の死亡數を見るならば、五歳未滿の幼児が凡そ五十萬人死亡し、就中、最も多

きは一歳未満の乳兒で、その數は三十萬に達するといふ誠に悲しむべき實狀を示して居るのである。

今、これを他の諸文明國の狀況に比較して見るならば、次の表に示さるゝ如く、我國の狀態の甚だ劣等に位してゐるこ

各國の乳兒死亡率(出生百に付一歳未満者の死亡)

年	次	日本	英克蘭及威爾斯	佛蘭西	獨逸	和蘭
昭和二年(一九二七年)		一四・二	七・〇	八・三	九・七	五・九
同 三年(一九二八年)		一三・八	六・五	九・一	八・九	五・二
同 四年(一九二九年)		一四・二	七・四	九・五	九・六	五・九
同 五年(一九三〇年)		一二・四	六・〇	七・八	八・四	五・一
同 六年(一九三一年)		一三・二	六・六	七・六	八・三	五・〇

へられたのである。

*

斯くて、會議出席者の熱心なる研討の結果、その主なる原因として擧げられたものは、要するに、

- 一、妊産婦衛生の不完全なること
- 二、母親の體質の虚弱なること
- 三、育兒知識の不充分なること

更に第四として、貧困なるが故に子供に對して充分養育の手を盡すことの出來ないものが多いといふことであつた。

即ち、出生後五日以内に死亡するものが、一ケ年に死亡する乳兒總數の約二割、一ヶ月以内に死亡するものが約五割に相當するといふ事實は、妊産婦衛生の不完全なることを裏書するものであり、又乳兒の死亡原因中、左表によつて示さる

る如く、畸形兒及び先天性弱質がその最高位を占めてゐるこいふことは、取りも直さず、母親の體質の虛弱なることを示してゐるのである。更に、同表に於て示さるゝ死因は、下痢及び腸炎、肺炎、氣管枝炎等の順序になつてゐるが、これらは明かに育兒知識の不充分なることを物語るものであると同時に、貧困なるが故に、養育上の手を盡すことが出来ないこいふことを證するものである。

斯くの如く考慮を巡らす時、我國の美風であること云はれてゐる兒童愛護の傳統は、實は何等近代科學に基礎づけられたものではなくして、徒らに盲目的な愛撫にすぎざるものであつて、誠に遺憾の極みであること云はねばならない。

茲に於いてか、この高率の乳兒死亡率を如何にして低減し、日本をして名實共に子供の樂園たらしむるこいふ出来るか、その具體的方策を講究し、その結果を實際に進めて行くこいに全力を傾ける事が、會議出席者の等しく重大責務であること痛感した所であつた。

主なる原因別乳兒死亡(昭和五年)

實數	全國人口十萬以上の市	
	生産千に付	總乳兒死亡千に付
畸形及先天性弱質	六二・一〇三	二四〇・〇六
下痢及腸炎	五八・二五〇	二二五・一六
肺炎及氣管枝肺炎	四〇・九七二	一五八・三七
腦膜炎	一四・七七六	五七・一二
乳兒に固有の疾患	一二・九九九	五〇・二五
急性氣管枝炎	九・六五四	三七・三二
脚氣	七・八九七	三〇・五三
百日咳	四・一五	一五・九一
微毒	三・五〇七	一三・五六
腎臟炎	二・四八四	九・六〇
外因死	一・九八三	七・六七
麻疹	一・八七二	七・二四
流行性感	一・四三四	五・五四
腹膜炎	一・二二五	四・七四
胃の疾患	一・二二二	四・七二
心臟の器質的疾患	一・二〇三	四・六五
		實數
		生産千に付
		總乳兒死亡千に付
		實數
		生産千に付
		總乳兒死亡千に付
		一・九一
		〇・七二
		二一六・六七
		二二五・三六
		一七七・三一
		五七・四六
		五五・四九
		二四・〇八
		六五・四一
		二四・二七
		一六・八一
		九・〇八
		七・四七
		九・一一
		五・一一
		三・三九
		一・六五
		六・一七

今日の幼児は、やがては次の時代の國民として一家を支へ、一國の中堅となり、家運の隆盛、國運の發展を雙肩に荷ふものであることを考へるならば、乳幼児の健全なる發育は、單に一家の幸福のためのみならず、國家としても、最も重要な問題であらねばならぬ。

故に歐米の諸國に於ては、國家としても國民としても、子供の保護に非常なる努力を致し、施設を備へてゐるのである。

獨逸のカイザリン・オーグスタ・ハウスの如き、澳國のオーストリア國立母性乳兒保健所の如き、又英國のカーチギー記念乳兒保護協會の如き、何れも、一國の母性保護、兒童保護のセンターとして、母性及び兒童の保健衛生に關する調査研究、母性及び兒童の保護事業に従事する職員養成、國民に對する育兒思想の普及等に全力を注ぎ、更にそれ等の保護施設の擴充に努めてゐるのである。

而して、これ等諸外國に於ける兒童保護施設中、最も一般的に普及してゐるものは、母性相談所とも稱すべきものである。これは、兒童の保護に關する一切の相談に應じ、且つ必要な指導を與へることは勿論、訪問婦をして妊産婦又は乳兒のある家庭を訪問せしめ、懇切なる指導注意を與へ、且つ母親及び婦女子に對して、育兒知識を得せしむるに務め、必要に應じて貧困家庭の母性及び兒童に對しては、種々の保護の途を講ずるものである。

又ニュージーランドに於ては、一九三二年即ち昭和六年の報告によれば、全乳兒の六割七分が、この施設によつて保護を受けて居り、出生兒の六割七分が、母親相談所で取扱はれてゐる云ふことは、この國が如何に、子供の保護に熱心であるかを示すものであり、同時に如何にこの母性相談兒童保護所の働きが、子供の死亡を少くするに役立つものであるかを物語るものであると考へる。

又英國に於いても、この種の施設が著しい効果を擧げて居るのであつて、一例を擧げるならば、一九〇六年に於ける母性相談兒童保健所の數は僅かに二つであり、當時の乳兒死亡率は、出生一〇〇につき一二・三人であつたのが、一九二〇年

には、その數は一躍して一五七四ヶ所に増加し、死亡率は之を反比例して八人に低下してゐるのである。

更に一九二八年には、その施設數は一層増大擴張せられ、二四二一ヶ所となり、死亡率は實に、一〇〇につき六・五人に減少したといふことは、誠に母性並に兒童保護施設が如何に効果を擧げてゐるかを示す適例であるに信するのである。

歐米諸國に於ける兒童の死亡率の低下は、固より一般文化の發達殊に醫學の進歩に因ることは多大であるが、その原因の一つは、やはりこれら統制ある母性並に乳幼児に關する保護施設の發達したること、一般國民の母性並に乳幼児に對する保護、衛生に關する知識の向上にあること云はねばならぬ。茲に於いて、各國の經驗に鑑み、且つは我國乳兒死亡の原因を相綜合して考慮するならば、結局、我國の乳兒の死亡率を低める方策についても、それは母性並に兒童の保健衛生に關する思想の普及及びその保護施設の發達に俟たねばならぬといふことに歸著することは、既に、第一回兒童保護事業會議に於ける研究の結果としても、滿場一致首肯するところであつたのである。

*

この意味に於いて、同會議は、この目的達成の一具體案として、毎年一回五月五日の端午の節句を期して、全国的に乳兒愛護デーを開催し、一般國民の覺醒を求めんとするに決したのであつて、第一回全國乳兒愛護デーを、その翌年即ち昭和二年五月五日、中央社會事業協會主唱の下に各廳道府縣相呼應して一齊に開催したのである。

爾來回を重ねることを六回、しかも昭和五年に開催せる第二回全國兒童保護事業會議に於いては、本運動は一日を以ては不充分である、一週間に延長して一層これが趣旨を存するところを廣く知らしむべきことを決議し、昭和六年よりは、これを全國乳兒愛護週間と改稱し、今日に及んだのである。

この間、協力一致、全國民に向つて、妊産婦の衛生知識と育兒知識の啓發について注意を喚起し、一方母性並に兒童の保護施設を普及發達せしむることに努力を續けて來たのであるが、本運動開催當時より今日に至るまで、乳兒死亡率は

毎年低下の現況にあることは、誠に欣喜に堪えないところであつて、即ち昭和二年に於ける我國の乳兒死亡率は出生一〇〇人につき一四・二人であつたが、昭和六年には一三・二人に低下してゐるのであつて、これは、單に獨り本運動の效果のみは斷じ得られないにしても、そのために、國民の中に漸次、眞の兒童愛護の精神が普及せられて行きつゝあることの結果であることは云ふまでもないのである。

然し乍ら過去五年間の實績は、未だ歐米諸國に於けるこの種運動に比較して、及ばざることは、はるかに遠いものがある。今後一層聲を大にして、その目的の達成のため努力せねばならぬのである。

本年は、別項の如き要項に従つてその第七回目を行ふのであるが、その例年に比較して注意すべき點は、從來比較的重要視されてゐなかつた工場鑛山に勞働するものの婦人及び乳幼兒の保護に關するものである。

當局の調査によれば、これらの婦人の乳兒死亡率は一〇〇に對して二〇といふ高率を示してゐるのであつて、これらの原因は、云ふまでもなく、彼等婦人達の過勞、環境の不健康、及び工場鑛山に於ける母性並に乳幼兒保護施設の不完全にあるのであつて、時節柄最も寒心に堪へないところのものであるからである。

要は、本運動は、人道的至情、愛國の精神を基礎とする一大國民運動であるが故に、單に一時のお祭り騒ぎに終始すべきものではない。國民全體がこの運動の趣旨を諒解し、更に進んで、お互ひに、平素に於ける家庭生活の上に、これを織込んでこそ、その目的を達成し得るものであることを信じて疑はぬものである。

第七回全國乳幼兒愛護週間實施要項

一、名稱 第七回全國乳幼兒愛護週間

二、目的 乳幼兒愛護に關する知識の普及並に乳幼兒保護施設の擴充發達を圖るを以て目的とす

三、期間 昭和八年五月五日を中心としてその前後を通じて一週間とす但し地方の狀況により適當に伸縮することを得尙その中日

を「母の會」として計畫實施すること

四、主 唱 財團法人中央社會事業協會

五、後 援 內務省・文部省

中央に於ける實施事項

- 一、妊産婦及び乳幼児保育心得(パンフレット)の作成頒布
右は各地産婆會、市町村役場を通じて妊産婦に普く配布する外ラヂオ講座、講習會、講演會用テキストとして一般に利用すること
- 二、健康診査票の作成頒布
- 三、第六回全國乳幼児愛護週間に於ける健康診査票の集計發表
- 四、妊産婦及び乳幼児保護並に當該施設に關する資料の作成發表
- 五、乳幼児愛護歌の印刷頒布
- 六、週間宣傳用ポスターの圖案募集
- 七、週間宣傳用ポスターの作成頒布
- 八、各道府縣知事、朝鮮總督、臺灣總督、樺太廳長官、關東長官及び各地方社會事業協會長に對し週間實施に付盡力方を依頼すること
- 九、內務省(社會局、衛生局)に對し週間實施の趣旨に賛し各道府縣知事に對し夫々その管下に於ける右週間實施につき盡力方相成様通牒を依頼すること
- 一〇、日本赤十字社、愛國婦人會、濟生會、大日本聯合青年團、日本醫師會、日本齒科醫師會、日本産婆會、萬國婦人子供博覽會に對し週間實施につき協力援助方を依頼すること
- 一一、乳幼児愛護に關するラヂオ講座(一週間繼續)につき中央放送局へ交渉すること
- 一二、週間中一夕を「乳幼児の夕」としてプログラム編成方につき中央放送局へ交渉すること
- 一三、新聞社、雜誌社に依頼して乳幼児愛護に關する記事を掲載し週間實施の趣旨の宣傳を爲すこと

一四、工場、鑛山に於ける妊産婦保護、乳幼児保護促進のため大藏省、逓信省、鐵道省、陸軍省、海軍省、産業福利協會、全國産業團體聯合會に對し協力援助方を求むること

地方に於ける實施事項

- 一、妊産婦及び乳幼児保育心得を産婆會、市町村役場等に於いて普く妊産婦に行き互るやう配布すること
- 二、幼稚園、託兒所、學校、教會、寺院、神社、劇場、寄席、活動寫真館、浴場その他多人數集合する場所を利用して乳幼児愛護に関する知識の普及並に當該施設利用に關し宣傳を爲すこと（講話又はポスター揭示、パンフレット、リーフレットの配布等に依る）
- 三、乳幼児愛護に關する知識普及のため講演會、講習會、活動寫真會、母の會その他展覽會等を開くこと
- 四、各新聞社、雜誌社に依頼して乳幼児愛護に關する記事を掲載し週間實施の趣旨の宣傳を爲すこと
- 五、乳幼児愛護に關しラヂオの放送を爲すこと
- 六、乳幼児審査會、健康相談會等を催すこと
- 七、育兒上著しき弊害ありと認むべき地方的風習を指摘しその改善を圖ること
- 八、各交通機關當局に依頼し汽車、汽船又は自動車に週間宣傳のビラ、ポスター、旗等を掲ぐることに
- 九、各パートメントストアに依頼して週間實施の宣傳を爲すこと
- 一〇、乳幼児愛護に關するパンフレット、リーフレット、母親讀本、育兒カレンダー等の作成頒布
 - 一一、産院、託兒所、乳兒院、牛乳配給所（調乳所）健康相談所、習性相談所、訪問婦その他妊産婦及び乳幼児保護施設の擴充發達を圖ること
 - 一二、貧困なる妊産婦及び乳幼児の救護に盡力すること
 - 一三、地方の事情に應じ牛乳資金の募集を爲すこと
 - 一四、主催團體は成可く各道府縣並びに同社會事業協會、樺太廳、臺灣社會事業協會、朝鮮社會事業協會、滿洲社會事業協會等とすること
 - 一五、參加團體は成可く日本赤十字社、愛國婦人會各支部、濟生會、各地に於ける聯合婦人會、女子青年團、醫師會、齒科醫師會、産婆會、その他各種社會事業團體等とすること